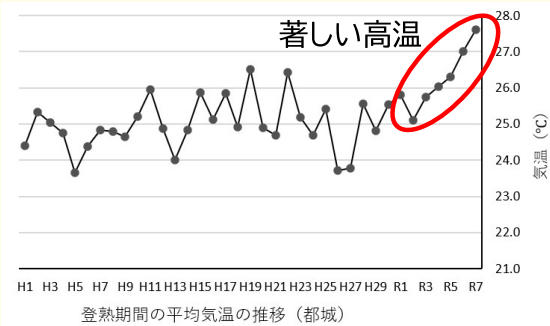


高温年の種子は要注意！

宮崎県産米改良協会

令和7年産種子は登熟期間の異常高温により休眠が深く、翌年播種時期の発芽率が低くなる傾向があり、「ヒノヒカリ」は特に問題となりました。今後も高温傾向が予想されるため、注意が必要です。

1 高温で登熟すると休眠が深くなり発芽が不揃いに

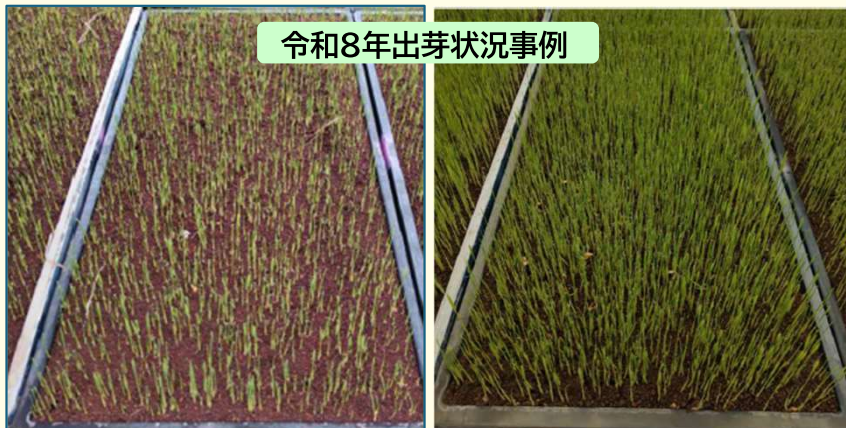


宮崎県の普通期水稻種子産地である都城市における「ヒノヒカリ」の登熟期間(8月下旬～9月下旬)の平均気温は近年急上昇しています。登熟期間の気温が高いと、種子の休眠が深くなります。

2 高温翌年に発芽を揃えるポイント

- ・出芽を揃えるため浸種温度は20℃以下を目安とし、極端な高温になりすぎないように注意しましょう。
- ・浸種時は種籾が完全に水没するよう種籾重量の2倍以上の水を入れ、酸素を十分に供給するために、1～2日ごとに水を入れ替えましょう。
- ・浸種中は、こまめに種子の状態を確認しましょう。
- ・発芽ムラを解消するために催芽器や育苗器等を利用した加温処理による催芽を行いましょう。
- ・浸種後催芽を行う場合は30～32℃とし、極端な高温にならないよう注意しましょう。
- ・発芽状況を確認しながら、必要に応じて浸種期間を例年より1日程度延長するなどしましょう。

3 新品種「ひなた舞」は高温に強く発芽良好



ヒノヒカリ

ひなた舞



登熟期のひなた舞

※種子の購入は、最寄りのJAや主食集荷組合加盟業者にお問い合わせください